

2018年7月、「晴れの国岡山」が豪雨災害に見舞われた。あの猛暑の夏、全国から多くのボランティアが岡山に集まった。岡山市に本部を置く国際医療ボランティアAMDAも、困ったときはお互いさまという「相互扶助」の精神の下、総社市と倉敷市真備町地区で医療を軸とした被災者支援にあたった。AMDAは1984年の設立以来、被災地の判断を最優先する「ローカルイニシアチブ」を原則に支援活動を行ってきた。それをまさに地元で経験するとは、思ってもいなかった。

山陽新聞を讀んで

AMDA理事 難波妙



物語っている。7月4日の防災意識の向上につながる3日連続で掲載された「移住者が見てきた真の備」と題した企画記事は、倉敷・総社圏版に7月7日に掲載された。外部ボランティアを風化させることな情が、さまざまな葛藤を乗り越えてきた人たちの真実が、さまざまな葛藤を乗り越えて多くの被災者を支えていく。私の経験から学んだことを今後の災害

被災を経験した報道の使命

難波・たえ ノートルダム清心女子大文学部卒。2003年から国際医療ボランティアAMDAで、国内外の緊急医療支援や復興支援の調整業務、技術交流といった海外事業全般に携わる。11年6月から現職。現在はウクライナ避難者支援を目的にした医師団派遣の全体調整役も務める。熊本県益城町出身。総社市在住。59歳。

えてきた事実とともに、被災者との心のつながりが彼らの熱意を支えていたという一面も伝えられている。また、被災した記者の直面した絶望感や記憶とともに復興への期待をつづった記事「まび日誌」は、被災地の新聞記者しか記せない視点や記憶とともに復興への期待をつづった記事「まび日誌」は、被災地の新

深い傷みがよみがえってきた。これは、被災者一人一人が抱える個別の課題に寄り添って解決をはかろうとする。現在、「天災は忘れぬが、人災は忘るべし」を元紙として、その使命をこれからも追い続けることを期待したい。

「山陽新聞を讀んで」は月2回、日曜日に掲載します。